

大塚泰子

（平成二十七年二月号）

軽トラゆ鎌持つ人の降りて来ぬ朝のきやべつ畑はしづか

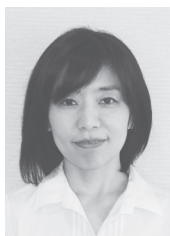
収穫を見てはいけなものの如とほく見て過ぐ自転車を降り

残されたきやべつの外葉 合戦の後に倒れしひとびとを思ふ

外葉のみ残されてゐる冬の夜の畑を満たすきやべつの匂ひ

明日もまた同じだらうか幾度も握り潰すごととめるホチキス

帰り来ぬ夫思ふとき手の中でザクンとホチキスが身震ひす



●作者の言葉

収穫後の夜のきやべつ畑には、きやべつがあった時よりもずっと、濃厚なきやべつの匂いが満ちていました。哀し

いというのでもなく、華やかなような、存在することの不思議さに触れたような夜の光景でした。そんな場面に立ち合い、ぼんやり考える時間が

幸せなのかなと思います。

今回、歌を続けてゆく上で大きな励ましを頂きました。これからもっと、人や自然や全ての物に先入観を持たず、真摯に向き合っていきたいと思えます。伊藤一彦先生、本当にありがとうございました。

●選者の言葉

一年間に特選欄に複数回推した人たちを中心に、年間選者賞の受賞者を選考した。印象に残っている作が多かったが、今年は石川県の太塚泰子さんを年間選者賞とした。大塚さんは二〇一四年七月、二〇一五年一月、同二月の三回を特選にしている。二月号の作を受賞作とした。

前半四首は「きやべつ畑」の歌である。「きやべつ」の立場になつているのが特色だ。一首目は収穫される前の「きやべつ」達の静かな緊張。二首目は彼らに鎌が入られるのを見たくないような、見てやりたような気持。三・四首目は外葉だけとなった「きやべつ」達。場面の描写も確かだが、発想の奥にあるものに惹かれた。五首目のホチキスの歌はその発想と無縁でない。